

 書評

神庭重信 著

思索と想い

精神医学の小径で

松下正明

神庭重信さんの文章を読むのはうれしい。何とも言えないユーモアがある。

神庭さんは、精神科医としての新人の頃に口髭を生やしたらしい。それを察知した師の保崎秀夫教授は、回診のたびに「また伸びた」「あっ、また伸びた」といって冷やかし、神庭さんは神庭さんで意固地になって、口髭を目立たせようと、「髭をひっぱったり、ミクロゲンパスタなる養毛剤を塗りたくったり」したという（「フレマンの髭闘争（保崎秀夫教授退職記念）」より）。その真偽はともあれ、神庭さんのユーモアには、自らの行為を愚化しながら、相手への愛情を漲らせるところがある。

しかしまた、神庭さんの文章を読むと襟を正すことにもなる。

村瀬嘉代子先生の退任記念誌への寄稿文「体験を作るもの（村瀬嘉代子先生へ）」で、神庭さんは、主催したある学会での村瀬先生の特別講演に触れて、「看取る立場にある者が傲慢になりやすい、というのは真実です。私たちはとかく、相手のために思いながらも、どこかで自分の価値観や都合をおしつけてしまいがちです。自分を殺し相手に共感できて初めて、相手のための看取りの行動へと導かれるのですが、これが実際にはとても難しい」と述べる。ここでの「看取り」は「精神科医療」に置き換えることもできるが、神庭さんはそんな分かりきったことは言わない。あるいは、「私はここを医学的・科学的に研究しています。しかし人のところは容易には分からない。分かったように思えるときでさえ、実は全く分かっていないのだろ

うと思います。だから臨床ではせめて、患者の体験としての苦悩を大切にしています」。

神庭さんの、切れ味のよい筆致で紡ぎだされる文体は、人への優しさや思いやりに満ちた文章でもある。あるいは、神庭さんの文章の特徴は、対象である相手やテーマに対して、愛情と尊敬を注ぎながら、しかしそれらにべったりと依存せず、ある種の距離を置きながら、どうしても譲ることのできない自己主張をほんわかと読者に伝えるところにある。

本書は、神庭重信さんが折に触れて書き綴ってきた、巻頭言、編集後記、小論、エッセイ、書評、挨拶の言葉などの文章をまとめた、いわゆる掌編集である。多数の掌編は、「医学の小径」「学会つれづれ」「道程」「精神医学のまなざし」「書評：本との出会い」「贈る言葉：先生方へ」「私と大学と学生と」の7つの章に分けられている。この章のタイトルを見るだけで、これらの掌編の内容が分かりそうな気がする。

しかし、掌編といってあなどってはいけない。すべての掌編の根底には、「精神医学とは何か」「精神医学研究の目指すべき方向はどこか」「精神科医療のあるべき姿」への問いかけに関する神庭さんの長年にわたる思索と想いが潜んでいる。だからというわけではないが、神庭さんの本書を読み終わった後、いくらか賢くなった自分を発見する。

（東京都健康長寿医療センター）

●四六版 434頁 2014 定価：本体：3,700円
+税 慶應義塾大学出版会